

第 27 回上信越神経病理懇談会

日時 2001 年 11 月 3 日 (土)

会場 新潟大学医学部 第 1 実習室

世話人 高橋 均 (新潟大学脳研究所病理学分野)

1. 臨床的には germinoma と考えられた中脳蓋部腫瘍の一例

村田 貴弘*, 多田 剛*, 伊泊 広二*, 酒井 圭一*,
田中雄一郎*, 本郷 一博*, 小林 茂昭*,
小林 基弘**, 佐野 健司**

*信州大学脳神経外科

**同 中央検査部病理

症例: 患者: 28 歳, 男性.

主訴・現病歴: 複視・頭痛. 平成 12 年 7 月頃より上方視にて複視出現, 11 月に急性水頭症による激しい頭痛にて発症した. 他院 MRI にて中脳蓋部腫瘍による中脳水道閉塞を認め, 脳室腹腔短絡術を施行された. Follow up MRI にて腫瘍増大あり平成 13 年 3 月当科紹介となる.

現症: 意識清明. 瞳孔同大, 対光反射両側鈍麻. Parinaud 徴候と付随する複視を認めた. 頭部 MRI で腫瘍は中脳蓋に主座を置き両側視床に進展していた. T1・T2 強調画像で共に等吸収域で, Gd-DPTA にてほぼ均一に腫瘍は造影された. 最大径 25 mm で境界は不整, 両側視床に腫瘍浸潤が疑われた.

手術所見: 4 月に神経内視鏡的腫瘍生検術を施行した. 軽度赤色の腫瘍を中脳水道周囲に認め, 中脳水道は閉塞していた. 数カ所にて生検を行った. 出血は軽度であった. 腫瘍内部は柔軟であった.

病理所見: 組織球の増生を伴う小型から中型のリンパ球浸潤と反応性 astrocyte の増殖を認めた. T cell と B cell からなるリンパ球が瀰漫性に浸潤し, 一部では血管周囲に集簇していた. HE 染色標本では明らかな germinoma cell は認めなかった. 群馬大学第一病理学教室で行われた免疫染色でも PLAP, PAS 陽性の germinoma cell は認めなかった.

術後経過: このため外来で MRI follow up を行っていた. 徐々に腫瘍増大を認めたため test radiation 20 Gy を施行, radiation 後の MRI で腫瘍の縮小を認め臨床的には germinoma と考えられた. 総量 46 Gy の放射線療法を行った. 施行後の MRI で腫瘍はほぼ消失しており, 痕跡程度となった. 経過良好で現在外来 follow 中である.

討論: 検討会にて germinoma の可能性が高かったが, リンパ球の核に一部不整なものを認め, 特殊なタイプの lymphoma の可能性も指摘され, 確定診断は得られなかった.

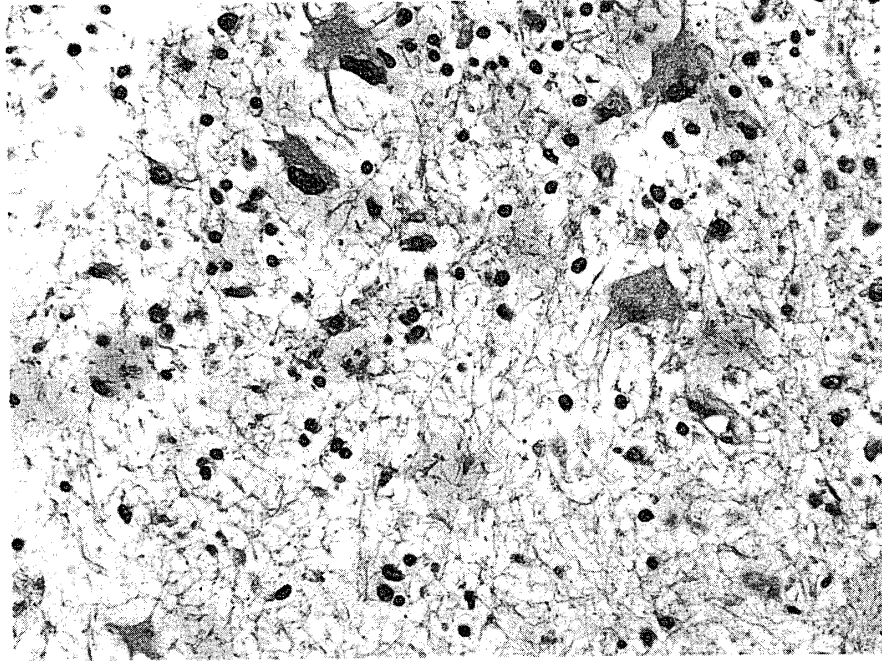


図1 組織球の増生を伴う小型から中型のリンパ球浸潤と反応性 astrocyte の増殖を認めた (HE).

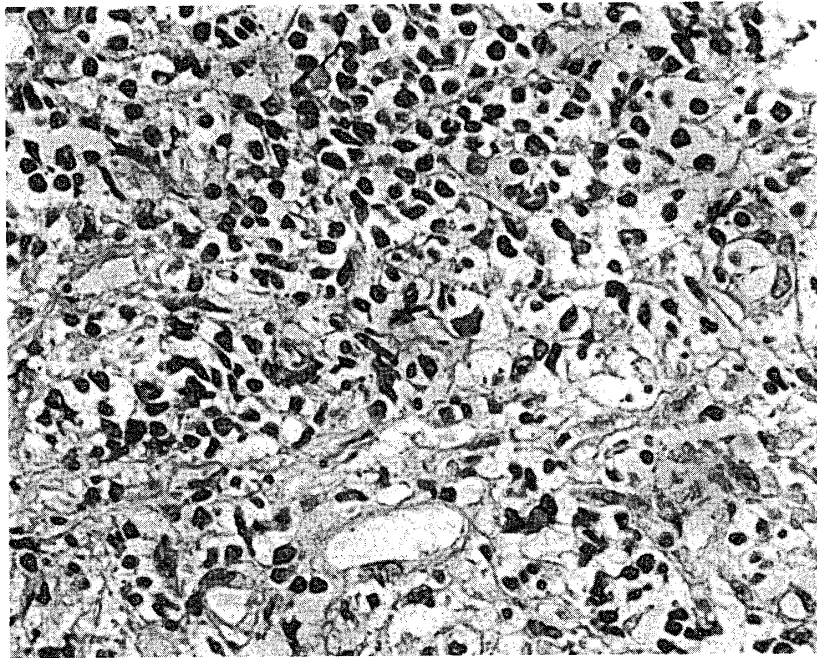


図2 T cell と B cell からなるリンパ球が瀰慢性に浸潤し, 一部では血管周囲に集簇していた (HE).